

# 防災ワークショップにおける

## ファシリテーション評価方法の開発

公共システム研究室 熊毛健太

### 1. はじめに

地区防災計画制度が策定され、地域住民が主体となって防災計画を作成することが可能となった。防災ワークショップ（以下、WS）の役割の一つとして、地域特性を反映させた実行性の高い防災対策案を作成することが挙げられる。そこでファシリテーターは、住民から地域特性を明らかにする発言や、防災対策に関する具体的な発言を得る必要がある。しかしながら、ファシリテーターがどの程度議論に寄与できているのかは明らかではない。本研究は、発言内容と発言の推移を定量的に評価することを目的とし、発言録のテキスト分析を行う。

### 2. 評価方法

本研究では、防災WSにおける発言内容を「地域性」と「一般性」の観点から評価することを目的とし、WSの発言録にテキスト分析を適用する。WSの発言内容を前半と後半に分割し、それぞれにおける住民とファシリテーターの発言内容を評価する。さらに前半と後半の発言内容の変化を定量的に明らかにする。ここで、発言内容の一般性の指標として、地域防災計画ガイドラインを用いる。地域防災計画ガイドラインの内容とWSの発言内容の距離が大きければ、住民は地域特性に関する議論、対策案に対する具体的な議論を行っていたと判断する。

### 3. 分析方法

本研究では、発言者と発言内容の関係を明らかにするために、コレスポネンス分析を用いる。コレスポネンス分析は、クロス集計の結果を散布図で表現する解析手法である。行・列の関係を視覚化することが可能であり、言語データの分類に使いやすい手法の一つとされる。本研究では、列は発言者、行は単語に該当する。

分析手順を以下に示す。まず、発言録に対して形態素解析を行い、分析対象とする名詞、動詞、形容詞を抽出する。次に、頻出単語を発言者毎に集計し、クロス集計表を作成する。クロス集計表に対してコレスポネンス分析を行い、WSの前半、後半の分析結果を比較し評価を行う。

### 4. 分析結果

本研究では、沖縄県国頭村の防災WSを事例と

して分析を行う。国頭村では、2013年から地域単位の防災WSを積極的に行っている。WSは、各地区で3回実施され、住民とファシリテーターは、A、B、Cの3班に分かれて話し合った。その内、与那、伊地、辺野喜、鏡地の4つの地区の、第1回と第2回の防災WSを分析対象とした。

図1は与那地区の第1回のA班のWSの分析結果を示している。灰色の円は単語を示し、赤色の円は前半と後半の発言者を示している。図1より、A班のファシリテーターは、前半から後半にかけてガイドラインに近づいていることが分かる。住民らもファシリテーターと同様に後半にガイドラインに近づいていることから、前半から後半にかけて、地域的な内容から一般的な内容に変化したと考えられる。

一方で、図2は与那地区の第2回のC班のWSの分析結果を示している。図2よりC班は、前半から後半にかけて、住民とファシリテーターはY軸方向に移動している。前半から後半へ地域的な話題の転換が生じたのではないかと考える。

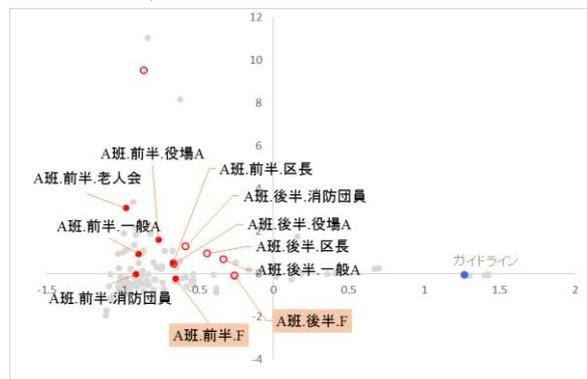


図1 与那地区第1回A班

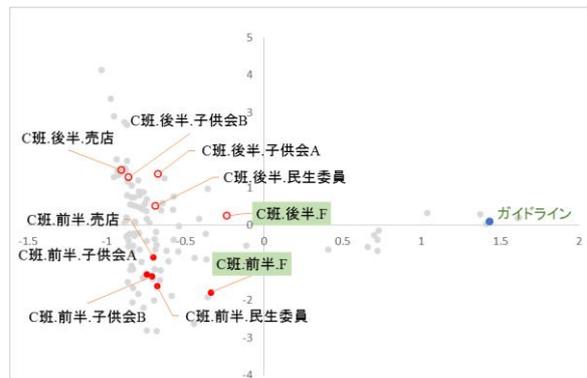


図2 与那地区第2回C班